

ダニエル・ベルと消費社会をめぐる論考

小林 大祐

KOBAYASHI Daisuke

1. 分裂した社会とは何のことか？

ダニエル・ベルが『資本主義の文化的矛盾』の序章において展開する、議論の前提と言って良いもの、それは「わたしは、現代社会を解明する一番よい方法は、社会を三つの独立した領域が不安定な融合体をなしているものとみることだと信じている。」(上巻：18)というような考え方であろう。彼は自身のこの考え方を分析学的なものと述べてはいるが、「その各々が異なった中軸的な法則に従っていると考えた方が、はるかに有益だとわたしは考える。」(上巻：37)とすることで、この三つの領域、すなわち技術－経済構造、政治形態、文化の領域が、それぞれ別の原理によって説明されるものであることを表明している。

第一の領域「技術－経済体系」とは生産の組織と財およびサービスの配分とに関わっていて、それは職業と社会の成層をかたちづくる。現代社会においてこの体系における「中軸的な法則は機能合理主義であり、その支配する様式は、経済化」であり、この分野における「中軸的な構造は、官僚政治と、企業における階級制」である。そして、この体系を貫いている基本的な原理、すなわち価値尺度とは「効用」である。構造の変化も、効率性によって方向づけられ、その中での役割も「有機的連帯」という形での分業、すなわち効率性の原理の中で与えられるというわけだ。

第二の領域「政治形態」とは「社会正義と権力との戦いが行われる場所」である。そこにおける「中

軸的な原則は合法性」、すなわち民主的政治形態においてなら、統治される側の合意に基づいていることによって権力が認められ、支配が行われ得るということである。「政治形態」における「中軸的な構造は代議制と参加」であり、これは政党や政治団体の形をとって、それを手段としておこなわれる。そして「政治形態」における決定原理は、政治活動というものがそもそも根本的に、相反し、しばしば相容れない諸利益の間を、調停＝判断するものであるが故に、判断基盤としての権威を備えている法規であったり、取引によって行われたりするのである、とする。

第三の領域「文化」とは「象徴的な諸形態の領域」更に言えば「表現的象徴主義の場」であるといえる。つまり、表現活動の諸形態において、「人間存在の意味を探り、何らかの想像力豊かな形式のもとに表現しようとする努力」なのである。その決定原理は、「意識の本質のうちで、すべての人間が直面する実存の実体」ということになろうか。文化の型の数が少ないのは「実存の実体」そのものの数が無数にあるわけではないからなのだ。

そして、このような考え方によってこそ、それらの間に生ずる矛盾について語ることができるようになる。いや、逆にこのように言うべきなのだ。彼にとって資本主義の文化的矛盾というテーマについて語るためには、社会はあるひとつの説明原理に基づくような統一的なものであってはならないのである。これらの領域が、それぞれのリズムの中で、それぞれの行動様式を合法化することによって、これ

らの領域間の不調和として発生する矛盾。これが彼の基本的な図式であるわけだ。

そして、これら三つの領域の間には、必然的に緊張関係が生ずることとなる。すなわち、形式上の平等と参加の原理によってたつ政治形態と、能率上の効用から形成される、階級制度＝官僚制的組織から成る技術－経済的社会構造との間に、また、自由な主体による自己実現と自己完成とを達成するために、「自己」を表現し作りなおすことが中軸的な法則たる文化と、やはり能率性によって分業化＝役割化の中で主体を切り刻むこともいとわないう技術－経済的社会構造との間にも矛盾は避けられない。

我々の社会の持つ潜在的な葛藤の根本原因は、これらの相互矛盾によるものなのだ、と彼は断言するのである。

繰り返しになるが、彼のこのような見方を支えているものは、経済と文化という二つの領域が分離して相矛盾するものとなっているという認識そのものである。「歴史的には、経済と文化という二つの領域は、結合して単一の性格構造を構成していた。(中略)これが、いまやまったく分離してしまった。」(上巻：47)とあるように、元は単一の次元の信念に基づいていたものが時を経るうちに分裂し別々の原理によって動くようになってしまったことが彼にとって、そもそも問題のあることなのである。彼はこのような流れを「文化の優位」として捉える。つまり今や「文化が社会を動かす」のだというわけだ。

しかし、このあたりの議論には正直疑問を覚えざるを得ない。そもそも彼は文化の領域を大きく評価し過ぎなのではないであろうか。この本の後の部分において、彼は狭い意味での文化に宗教的なしほりを与えることで社会全般にたいするヘゲモニーを与えようとするのだが、それは彼が文化と社会との分離を前提としているからに他ならない。しかしその前提自体が疑わしくはないであろうか。

ベルは「皮肉なことは、この文化そのものが、資

本主義の経済によって生み出されたものであることである。」(上巻：85)と述べているように、元々は資本主義的経済－社会構造とパラレルだった、勤勉さ・禁欲的という気風のプロテスタンティズム文化が、自己を唯一の判断基準として、自分の感覚が合理性や知性に優越するような現代文化にとって変わられ、追い落とされつつあることが結局、経済的合理性と矛盾をきたしていることの皮肉を嘆くわけであるが、ここに欠落しているのは、そのような文化の変化がいかにして、何のために起こったのか、という幾分素朴ともいえることへの視点である。つまり、ベルは現代における文化が、大幅な自律性を獲得しているという認識に信を置きすぎているがあまり、その文化の領域における変動が何に影響を受けているのかへの疑問を持つことをしないのである。また、彼はこうも述べている。

……現代的な意識においては、共通した存在なるものはなくなっている。あるのは自己のみである。この自己の関心事は、自己の個人的真正性である。すなわち、社会的仕組みや慣習から解放され、偽善や仮面をつけることがなく、社会によって自己が歪められることを否定する、変えることのできない独自の性格である。(上巻：53－54)

もちろん、このような意識、または価値観が現代文化の諸傾向の基底に一貫して流れているものであることは疑いようもないだろう。だが、そのような価値観を志向する諸個人のなかで、その判断基準となる「自分らしさ」、もしくは「内面」といっても良いかもしれない何か、それ自体が問われなければならないのではないだろうか。ベルは自分の論を進めるにあたって、この部分の間を確信犯的に回避しているのである。

2. 資本主義についてのふたつの見解

既にしたように、私はベルの、「文化の優位」→「文化が社会を動かす」の論理にはやや違和感を感じている。確かに文化という領域がかつてない影響力を保持し、固有の論理によってある程度の自律性を持って動いているという現状は疑いない事実であろう。しかし、そのような趨勢をそのまま力関係の変容として捉えてしまうのは、余りに皮相的ではないであろうか。

たとえそれが純粋に分析手法上の視点であったとしても、その手法はその視点を採ることによって明らかになることと、それによって取り逃がされてしまうものとの、比較によって成否が決まるものであり、もし彼の議論による領域の分解という主張によってシステムの巧妙化としての現実が見逃されてしまうのならば、その議論は最終的には乗り越えられねばならないものということになろう。まず消費社会を位置づける資本主義という議論を通じて、領域の分解という彼の主張を考えてみよう。

資本主義というものは、どう定義されるかによって様々な意味合いを持つわけで、それだけこの言葉に対する理解が一筋縄ではいかないということを示しているわけだが、とりあえずここでは、資本主義に対する定義としてふたつばかり挙げることにしよう。

まず、差異を利潤に結びつけてゆくメカニズムとしての資本主義という考え方があるであろう。つまり、岩井克人が『ヴェニスの商人の資本論』のなかで述べているような大航海時代、否それ以前より変わることなく続いてきた、一般的なメカニズムのことである。彼はこのように述べている。

商業利潤創出の秘密は、理論的には二つの価値体系間の「差異」にあり、具体的には商業資本によって仲介される二つの地域間の「距離」である。いわゆる「遠隔地交易」によるヴェニス、ポルト

ガル、オランダ、あるいは古代のカルタゴやローマといった商人都市や交易国家の繁栄が、その歴史的な典型を与えてくれる。

しかしながら、遠隔地交易が連続的になり、その規模が拡大すればするほど、それによって仲介された地域間の経済的な「距離」は縮まる。それとともに、両地域で成立している価値体系もその「差異」を失っていく。結局、商業資本とは、二つの地域を一つの価値体系が支配する一つの市場経済の中に統合していく媒介運動にほかならず、それは自らの存立基盤を切り崩していく仕組みを内に備えていることとなる。差異を仲介するとは、すなわち差異を解消することなのである。(岩井 1985:97)

つまり、ある体系のなかであるモノが担うことになる価値、それは希少性によって決定されると言ってもよいのだが、それが同じものであるのに別の体系において担われている価値と比較して相対的に高ければ、その品物を移転させることによって利潤が得られるのである。だから、このような意味での資本主義の歴史は、差異を食いつぶしてゆく歴史であると言ってよいであろう。そして、このような資本主義の定義のなかでは、消費社会の位置づけは、全ての差異を食いつぶして進んでゆく資本主義的運動が、決して食いつぶされることのない差異、すなわち言語＝記号＝イメージのレヴェルにおいて安住の地をみつけた段階であるということになろう（当然、本当の安住の地ではないのであるが）。

もうひとつの資本主義の対する定義は、資本主義を史的システムとしてみることである。いわば前に挙げた定義が一般性をもって資本主義を語ろうとするものであるのなら、これは、その特殊性・歴史性において資本主義を語ろうとするものであると言えるであろう。勿論、このような考え方の先駆者にして最大の功労者は、カール・マルクスなのだろうが、ここでは、資本主義を資本蓄積を支配目標とす

るという明確な方向性によって律せられる具体的存在として定義する I・ウォーラステインの『史的システムとしての資本主義』より引用を試みよう。

ここで史的システムとしての資本主義と呼んでいる歴史社会的システムの特徴は、この史的システムにおいては、資本がきわめて特異な方法で用いられる—つまり、投資される—という点にある。すなわち、そこでは資本は自己増殖を第一の目的ないし意図として使用される。このシステムにあっては、過去の蓄積は、それがそのもの自体のいっそうの蓄積のために用いられる限りにおいて、「資本」となったのである。(中略) それにしても、本書で資本主義的とよぶのは、資本保有者たちのこうした仮借のない、しかも奇妙に自己中心的な目標、つまりよりいっそうの資本蓄積と、この目標を達成するために、資本保有者が他の人びとのあいだに取り結ばざるをえなくなった諸関係のことである。(Wallerstein, 1983=1985: 4-5)

それまでの資本主義というシステムに先行した諸システムにおいても、少数者による消費されない資材の占有といった資本主義の初期条件が整ったことはあろう。しかし、長くて複雑な資本蓄積の過程において、たいていはあちこちで阻止されてしまうのである。では、なぜ近代以降、資本主義がそのような妨害を突き抜けて資本の循環が完結することになったのであろうか。彼はこれを「商品化」という言葉で説明しようとする。

したがって、史的システムとしての資本主義は、それまでは「市場」を経由せずに展開されていた各過程——交換過程のみならず、生産過程、投資過程をも含めて——の広範な商品化を意味していたのである。(中略) 資本主義は自己中心的なのだから、いかなる社会的取引も商品化というこの傾向を免れることはできなかった。資本主義の

発達史には、万物の商品化へとむかう抗しがたい圧力が内包されていた、といわれるのはこのためである。(Wallerstein, 1983=1985: 7)

つまり、資本主義が軌道に乗るようになるということは、資本が循環するシステムが恒常的なものとして完成することによって、資本家・企業家の利潤の再生産への見込みが立つようになることなのであるが、それが可能になったのはあらゆるものを商品化=市場経由化しようとする動きと、そのような運動が勢いを失うことの無いように支えてやることのできる権力の媒介によってであった。だから「市場」というものを公正・不変なものとして信奉するのはいささか楽天的に過ぎるのであって、勿論市場が競争原理を成り立たせていることは確かなことであるが、その市場自体がある種の制度の産物として捉えられなければならない。市場は水平的独占に対する競争という意味では幾らか公平であるにしても、その背後に「商品連鎖」における垂直的統合、もしくはそれによる「辺境」から「中核」への資本集中という「不等価交換」のメカニズムを見えにくくしている隠れ蓑として、近代主義的合理性という考えとともに一定の機能を果たしてきたのだ、という訳である。

だから、彼は「資本主義というものは、その擁護者がときとして主張してきたような「自然な」システムなどではまったくない (Wallerstein, 1983=1985: 48)」と結論づけている。歴史的である以上、いつかは内部での矛盾の激化から構造的危機を惹き起こし、他のシステムにとって代わられる。マルクスのように社会主義が次に来るものなどと単純に言うことはできないとはいえ、「史的システムとは文字通り歴史的なものである。それらはいずれも、生まれ出で、やがてその内部で矛盾が激化して構造的危機を惹き起こし、結局は内部から崩れて消滅するものである。(Wallerstein, 1983=1985: 130)」と彼は主張するのである。

3. 資本主義における消費社会の位置

上述してきたような、ふたつの資本主義というものの捉え方。これらはそのそれぞれの特異性と一般性ゆえに互いに排除しあうものとして考えられるべきであろうか。おそらくそうではあるまい。ウォーラステインが言ったように「この史的システムは15世紀末のヨーロッパに誕生した（Wallerstein, 1983=1985: 13）」もので、現在の世界はそのシステムが空間的に拡大し続け、全世界をカヴァーしたものであるとしても、その拡大が純粋に特殊な具体的事例であったのだとするのは不自然であろう。彼は「あくなき資本蓄積こそが重要な経済活動のすべてを支配する目標ないし「法則」となっている」と述べて、そうした価値法則が「貫徹する範囲がどんどん拡大してゆき、それを強制する立場のひとつがますます威丈高になってゆくような社会システム（Wallerstein, 1983=1985: 12）」こそ史的システムとしての資本主義であると主張するわけであるが、「あくなき資本蓄積」を支えるのが先に挙げたような、差異を利潤に結びつける、というより利潤となるあくなき差異追求をするメカニズムの反映である以上、資本主義が「自然な」システムなどでは全くないとするのは、やはり極端ではないだろうか。資本主義は、人間の無限の欲望による「自然な」社会か、どこまでも「歴史的な」ものに過ぎない社会か、という二者択一では割り切れないといえよう。

以上資本主義について長々と述べてきたわけだが、ここで再びベルの文化の自律と領域の分裂というテーマに戻ってみよう。果たして、文化が自律しているという彼の考えは本当に正しいのであろうか。差異を利潤に結びつける、あくなき運動としての資本主義という観点からは、この考え方は大いに疑問である。というのも、このような動きは差異を求め、それをひたすら食いつぶすものであるため、その差異の単位となるものは、常に小さくなってゆく傾向が見られるからである。つまり、ウェブレン

が『有閑階級の理論』で明らかにしたような階級単位の差異による「誇示的消費」への指向性から、その差異の単位は当然小さくなり個人単位へとなるわけである。だから、個人単位での差異創出による、「自分らしさ」をバックにした消費への圧力は、このような流れから見分には至極当然であり、それを個人の快樂追求への指向性として、単なる文化の自律的変動として片づけてしまうのは、いくらなんでも素朴すぎると言わざるを得ない。

実際、消費の圧力はいまや、経済－技術構造的に規定された役割からの解放としての個人を差異の単位として働くよりも、むしろ個人のもつ幾つかの役割をT・P・Oとして使い分けることを、個人がいくつもの人格を自由自在に使い分けることを積極的に後押しすることで、更なる細分化された差異を消費させようとしているように見える。それは、例えば会社では組織のまとめ役をきっちりこなし、家庭では家族想いの父であり、たまの休日には仕事を忘れ趣味にふける、というようなシステムのそれぞれにおいて与えられた役割を葛藤を感じることもなくこなすことのできる人物が、それぞれの状況に応じて消費を行うというところである。

ここに見られるのは、紛れもなく単位を細分化して差異を生かし続け、それを消費に結びつけようとする資本主義の論理であって、ベルの言うような「自己の個人的真正性」ではないのである。彼は「社会は、変革を単に受け入れるばかりか、新しさの追求のための市場をも提供している」（上巻：78）としているが、このような主張も全く順序が違っている。より正確には、社会はその変革が市場において価値を持つからそれを受け入れるのであるし、よって、文化の領域において新しい感受性として認められるのは、たいがいの場合その差異が「新しさ」というイメージをまとうことによって、価値を持つからに他ならない。差異にとっては、「新しい」とみなされようが「古い」とみなされようが、それ自体は大したことはない。要はその差異が利潤に結

びつく、すなわち消費意欲を呼び起こしさえすればよいのである。

また、自己増殖のために投資された資本が、ある程度安定的に循環するシステムの完成形態として資本主義を捉えるウォーラステインにとっても、ベルの主張は表面的に過ぎるであろう。かれはこう述べる。

たとえば、「資本家」に相当する人物にとっては、つねに労働力が得られるのでなければならなかったわけだが、ということは、アメでつられてであれ、鞭で強制されてであれ、しかるべき労働をなしうるものがつねに存在しなければならなかった、ということである。労働力が得られて、商品が生産されたとしても、こんどはそれを何とかして売り捌かなければならない。ということは、流通機構と購買力をもった買い手の集団が不可欠だということである。しかも、商品は、(中略)近代的なタームでいえば、利潤にあたる部分もなければならぬ。そのうえ、この利潤を得た者が、それを保持していてしかるべきときに投資できる条件が整っていてこそ、はじめて最初の生産点に戻って全過程が更新されるのである。(Wallerstein, 1983=1985: 5-6)

つまり資本主義社会とは、資本主義の論理にヘゲモニーを与えている社会であり、その論理にそって整備されている社会、すなわち自己増殖＝投資を目的として資本が使用されてゆくことを前提とし、その循環の円滑化、恒常化を旨とするような諸環境、上に挙げられたような、常に得られる労働力、流通機構、そして購買力を持った買い手集団、を整備してゆく社会である以上、たとえ相対的に、それまでのどの時代よりも文化という領域が力を持っているのが事実であるにしろ、依然としてそれは、資本主義の論理の下にあり続けるのではないかと疑ってかかるべきであろう。そして、ウォーラステイン

は危機は別の所にあると言う。

この危機の第一の、そしておそらくもっとも根本的な局面は、いまや万物の商品化が完結の域に近づいているということである。(中略)「ひとつのものを別のものに交換し、交易し、取り換えたと思う性向」が、従来は触れられることのなかった分野や地域にも浸みわたり、商品化の過程を促進する圧力には、ほとんどブレーキが効かなくなっているのである。(Wallerstein, 1983=1985: 130-131)

このように、文化の領域の自律化、優位はベルの主張するような他領域との矛盾による危機として捉えられるより、決して単なる従属関係に置かれているのではない文化の領域が、資本主義の論理とある種の共犯関係となることによって可能となった、資本主義の論理の際限なき暴走による危機として捉えられなければならぬ。文化は変動している。それ自体は間違いあるまい。しかし、それは新しさという方向性を持った定方向的運動では決していない。文化は自律性を持っている。それも間違っではいるまい。しかし、その自律性は資本主義の論理を超越するところにまで達するものではないのである。

4. まとめ 文化の相対的自律性の相対性

以上のように考えてきてみて、文化の領域が社会に対してどのような位置を占めているのかは、資本主義の論理と切っても切り放せないのだということがわかったわけであるが、そのような文化の位置は、ひとことで言い表すとすれば、「相対的自律性」というところになるであろう。勿論この言葉が強調するところは、その相対的な点である。文化が自律性を持っているということが出来るゆえんは、それが外部からの拘束を受けながらも、それに対し自らの継承する論理に従って再解釈してゆく力にもとづい

ている。そして、それが相対的でしかないのは、そのような自律性に与えられる承認が結局のところ、市場価値としてどれだけ機能するかという基準において、拘束を受けているからである。だから、このような相対的自律性は、その相対性を絶対性と誤認させることによって正統性を得て、うまく機能するようになる。

つまりブルデューが教育システムについて「近代社会が、社会的有利さを、それ自体社会的有利さに逆変換しうる学校の有利さへと変換する力を行使するさまざまな機会を、教育システムに提供することも理解できる（Bourdieu & Passeron, 1970=1991：191）」と述べるのと同じやりかたで、資本主義消費社会が、市場における有利さを、それ自体市場における有利さに逆変換しうる文化的有利さへと変換する力を行使するさまざまな機会を、文化に提供することも理解できる、と言えよう。

かといって、何も私は人間とは何から何まで決定された、あらゆる変数の解=集積結果である、などと言うつもりはない。だからといって、人間があらゆる偏見を逃れた自律的判断をもとに行動している、とは全く思えないし、そもそもそんなことができるとも思わない。ありきたりだが、我々は決定論に対して働きかける自由を備えているのであり、「自由」とはそのような意味で使われねばならない。ブルデューの例で言えば、われわれは重力の法則があるからこそ飛べる、のであり、この意味でわれわれは資本主義の論理への自覚があるからこそ文化の領域をしっかりと捉えられるのである。

<参考文献>

- Bell, Daniel 1976 *The Cultural Contradictions of Capitalism* = 1977 林雄二郎訳『資本主義の文化的矛盾』（上）（中）（下）、講談社
- Bourdieu, Pierre et Passeron, Jean-Claude 1970 *La Reproduction* = 1991 宮島喬訳『再生産』、藤原書店
- 岩井克人 1985『ヴェニス商人の資本論』、筑摩書房
- Wallerstein, Immanuel 1983 *Historical Capitalism* = 1985 川北稔訳『史的システムとしての資本主義』、岩波書店